
ランツ王国物語

先

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ランツ王国物語

【Nコード】

N8850G

【作者名】

先

【あらすじ】

舞台はランツ分邦王国。美しい男の子サダルメリクと人食い人種のムーフリッドの友情と勇気のドキドキ二人旅！ちよつと怖くてちよつと不思議な童話テイストの冒険譚。

祭りの前の日の話

ある雨の晩だった。

明日つから山岳祭（山開きの事。山開きから15日は山岳祭となり全国から登山者がキオ又の山岳道に集まる。）だった為に町は大変賑わった。

山岳祭は最高司書（1）の文皇様一行が最初に登山なさり、祈例祭を奉じた後に一般の巡礼登山者が頂上を目指すのだ。

夏山登山開始のこの時期はキオ又は世界中の熱狂を一斉に集めたように沸き上がっていた。

ムーフリッドが町にやってきたときはすでに宿屋はどこもいっぱい状態だったが『噴火亭』と言う宿屋で一室にありつけた。

「旦那運が良いね、ここは元々わしら夫婦のスイートルームじゃったんだよ。」

「何だい、あんたらの愛の巣のお下がりか。ところで酒場を教えてくださいませんか？仕事を探してるんだ。（2）」

「タイタン酒場つてのに行ってみな、朝食は魚と肉どっちが良い？」「魚が良いな。パンじゃなく米にしてくれ。」

「朝は7時半からだよ、明日は祭りだタンと働くんだね！」
そう言つて二回の奥の部屋に行つてみた。確かにスイートルームだ

っただけあつて広い、ベッドが二つあつた。

腰の大きな武器ホルダーとでかいバックパックを部屋に残し、一路タイタン酒場に向かった。

「親父、溶岩酒（3）ぬる爛で…それと仕事を探してるんだが…何か無いか？」

「ふおお！人食い人種かい？おまえさん」

「俺は魚食だよ」

「なんでーでかい図体でよく言つぜ。料理は出来るか？」

「何でも作れるぞ。」

「よし、何かつくってみる。」

「よし、まかせろ！」

そう言つて厨房に入った。

ムーフリッドという男は大変器用な人である。

体はうんと頑丈だ、それにうんと働いた。

働き口と言つたら何でもやった。

用心棒から飲み屋の料理場まで場所は選ばない、何でもやる。

手際よく、ジャージャーと炒め物を作つてみるが見るも鮮やかな手つき！

皿に盛つてみれば何とも旨そうだ。親父は喜んでわらつと口に運んだ。

「おつ、ほつほつ！おいお前さん、なかなかの腕前じゃないか！1

日：そつだ銀貨15枚やろう！」

「そいつあ、景気のいい話だ！」

「おい、おめえ何て名前だい？」

「はい、ムーフリッドです。」

「じゃあ、早速今夜から働きな！」

店は人が入りきらないほど盛況であつたが、明日はさらなる来店が見込まれた。

ムーフリッドが店から『噴火亭』に帰つたのも夜も更けてからであつた。

雨は小雨になり、霧雨で足下がうるうるると塗れるのが不愉快だつた。

宿に帰るとカウンターで一人の客が呆然と立ちつくしていた。

「親父、鍵をくれ。」

「おー旦那！待つてたんだよう、あんたあ。」

「何だい、恋人にすぎるような声を出して……」

「実はこのお客さんが……部屋が無くてひどく困つてるそうですよ。」

「どうぞ、ご主人、哀れな私に台所の一間でも貸してください……」

か細い声で哀願するその言葉は何とも同情を誘つた。

マントのフードからのぞくその顔は陶器の様になめらかな面で精緻な作りである、相当な美人であった。

「おい親父、こんな美しいお嬢さんを台所の床の間に寝かせてみる！山神様が憤怒すつぞ！俺の部屋を譲ってやれ。」

「あれあれ、よろしいんですか旦那？よろしゅうございましたね、お嬢さん！」

「大変申し訳ございません、俺は男です。」

「まあ！」

「はあ！」

親父とムーフリッドは大変驚いた。

(1) 百年図書館と言われる世界の書物全てを集めたという六角形の図書館が存在する。

その最高責任者である最高司書を文の皇、つまり文皇と呼ぶ。文皇は山岳信仰であるアーカ教の最高権威でもある。

(2) 酒場は大概、職安である。

(3) キオ又名物の酒。溶岩の地熱で温めて飲む。溶岩の成分で味がまるやか。

祭りの前の日の話2

「おい、お前。名前を言うんだ。」

ムーフリッドの容貌は珍妙である。体軀はまったく大きくて、顔にはぜんたいおかしな入れ墨があった。

外洋の人食い人種を思わせる体であったため、美しい男は大変怯えていた。

こんな奴と同じ部屋にいたら、明日になったら骨だけか、もしくは身包み剥がされ外に放つぱり出されるに違いないだろう。

「おっおっ俺の名前は…サダルメリクと申します。旦那…」

「ふふつ、面白い奴だな。俺はムーフリッドだ。お前はとても美しい顔をしているんだな！大変素敵だ！！」

そう言つてムーフリッドはサダルメリクの顔をぐりぐりぐりぐりと凝視した。

初対面の人食い人種に穴が開くほど容姿を伺われてサダルメリクの寿命は縮んだ。

「へっへっ部屋を恵んでくれてありがとうございます！旦那…」

「いいさ、どうせベッドは二つあるんだ。神様の思し召しだ。」

『噴火亭』の主人たちの愛の巢は今奇妙な二人の一夜の宿となったのだ。

「サダルメリク…ああ、サダで良いか。お前タバコは吸うか？」

「いえ吸ったこともございません…旦那！」

「そうか、男ならば是非吸つてみる。」

嫌とはとても断れないので、サダルメリクはすすごとタバコを口にしたが大きく咽せかえった。

「何だ、点で駄目じゃないか！」

「すみません…旦那…」

「お前歳はいくつだ？」

「17ですっぜ…旦那…」

「おい！旦那はやめねーか！」

「へい旦那……」

「……まあいいや。俺は25だ。俺の方が年上だな。よし、今日巡り会ったのも神様が導いてくれたんだ！俺とお前は今日から兄弟。お前の面倒は全て俺が見てやる！」

一方的にこう宣言されたが拒否することも出来ず、承諾したがサダルメリクは生きた心地がしなかった。

すると、ムーフリッドは荷物から小さな包みを取り出してきて、中からは小さな偶像が出てきた。

「さあ、今日の出会いを感謝して祈れ、さあ！」

そう言っただけで祈らされた。

サダルメリクは雨の中歩き通しでも疲れていたが、ムーフリッドが色々話しかけてきてなかなか眠れなかった。

ムーフリッドはやはり外洋からやってきた蛮族の戦士で、島の総長の皇子だったそうだ。

利発なムーフリッドは22の時好奇心の翼で海を渡り、大陸にやってきた。

彼は大陸各地を回り旅をしているそうだ。

「おい、サダ。お前金を出せ」

そう言われてサダルメリクは俄に青ざめた。これが奴の本性だろうか、金子を巻き上げられると気が動転した。

断つては大変だとおぼおぼ財布を取り出すと、ムーフリッドも汚い布袋を取り出した。

そして中からワラワラと金を取り出した。驚くかな、金貨が30枚も入っている。それに比べてサダルメリクは銀貨が3枚に銅貨が5枚ばかりだ。

それをムーフリッドはまぜこぜにして綺麗さっぱり二つに分けた。

「良いか、サダ。俺とお前は兄弟だ。財産も半分だ、良いか。困ったら何でも俺を頼るんだ。」

何だい、この人食い人種。まるで気前が良いじゃないか。サダルメリクは困惑した。

「さあさあ、明日からお前も働くんだ。きつとお前ならすぐ働き口が見つかるよ。おや、足が大変冷たいじゃないか。おれの腿っ玉で温めてやるっ」

そう言うとムーフリッドは二台のベッドをくっつけて横になった。

「ほら坊主、寝るぞ！」

こんな男と枕を並べるのかと、サダルメリクはガツカリしたが渋々布団に潜り込んだ。

布団は湿っぽくてひんやりしていた。ぶるっと身震いしてムーフリッドの布団に足を突っ込むと大変暖かく、こいつは良い暖炉じゃねえか…と思った。

二人は五分とたたため間にピープーと寝てしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8850g/>

ランツ王国物語

2010年12月5日09時46分発行